

報



會

會 岳 山 本 日

94

月 六・五 年 五 十 和 昭

犬 橋

宮 崎 武 夫

最近の新聞紙の報する處によると、バード少將は今度の南極探検に雪上自動車をもつて行つてゐる。何でも二十七噸もある大きなもので、雪上をどん／＼走り廻ることが出来る、クレバスも難なく渡れるものゝやうに記されてゐるが、その性能の詳細なことは未だ判らないし、また實際どの位の効果をあげるかは今のところもとより不明である。南極の雪上走破用として機械力の使用を思ひつたのには、曩にスコットがあり、近くはリミルがある。スコットの場合は苦心して作成したモーター・スレッジではあつたが、現在ではどうも思ふやうに行かず、折角の名案ながら、前進を急いだスコットはこれを雪上に放棄してしまつた。爾來三十年機械力——航空機は別として——の研鑽に耽る者なく極地及び亜極地帯では犬橋が交通用具の王座を占めてゐるが、最近のリミルの場合におけるトラクターや、今度の雪上自動車の出現に私は興味を感じてゐる。極地に造詣の深いバードのことではあり、キングスベレーや、リトル・アメリカでの少將のこれまでのやり口から推して、何れ相當の成績を収めることであらう。航空機や自動車は極地方の空陸に登場し、極地にも機械力萬能の時期が近い將來

に出現するかも知れないが、今のところでは橋と橋犬とがやはり主たる交通用具であらう。今度のバードにしても、雪上自動車の外に犬橋の準備は充分にしてゐるのである。雪上交通具の王者であるスキーはナンセンがグリーンランド横断に用ひた頃とは比較にならぬほどの改良、改装が現在では施されてをり、雪質、地形用途等に應じてそれ／＼のスキーとスキー術が出来上りつゝあるし、また理論的にも盛に論議されてゐる今日のことであるから、橋にもスキー滑走の理論を敷衍應用し、更にこれに加ふるに最近の構造力学の知識を以つて在來の橋の型を再吟味するならば大改良を加へる餘地は随分あることと思ふ。

謂ふまでもなく氷雪地帯に重用されてゐる橋には犬、牛、馬、馴鹿や人間に頼まざるがこれを見たり押したりしてゐる。牛橋、馬橋は極めて弘く實用に供せられてゐるが、極地地帯では牛橋は試みられてゐないやうだし、馬橋はボニーが使はれたがその成績は思はしくなかつた。馴鹿はその食物の關係上難點があり、ベルグマンの書物などには熊が橋を曳いてゐる記事や寫眞があるが、熊は一般實用としてはどうであらうか、極地々帯では犬橋が最も重寶がられてゐるやうである。ことにこれ等の地方の探検旅行には犬橋は不可欠のものとなつてゐる。

こゝでは犬橋の原動力である犬について思ひつたことがらを少し記し、犬橋には地域により、その用途に従つて種々の型式があり、その外にも探検隊で改装したものも出来てゐるから、これ等について出来れば觸れてみたい。

犬の輸送

アラスカ、グリーンランドやカムチャッカ地方で橋曳き犬を使役する場合は、現地又はその附近で所要の犬を調達して使へばよい、即ち現地調子が出来るから、この點は割合に簡單であるが、この犬を他地方、例へば南極とかカナダ北東端のエルスマア等で使ふ場合は、そこまで船で犬を輸送せねばならない。グリーンランドからエルスマア邊だとその距離はそう遠方でもないが、さほど問題でもあるまいが、これがグラハムランドとかロス海等になつてくるとその輸送距離が遠く、せまい船内で長日月に亘つて文字通り盤居させておかねばならない。のみならず赤道といふ至極厄介な難所を通過せねばならない。橋曳き犬は何れも寒地で生れて寒地で育ち従つて寒地には住み馴れてゐるが、それが急に非常な酷暑に耐へねばならぬし、人煙の稀な廣野を縦横に駆け巡つて居たのに、急に窮屈な船内にデットして居らねばならぬから、こゝに色々の無理が生じ大變厄介である。その上この赤道乃至熱帯の海洋は、犬の食糧を腐敗させてしまふ作用をするので、この腐つた肉を食ふと如何に頑

目次

- ・犬 橋……宮崎武夫……一
- ・槍平小屋の半壞について……二
- ・前穂高奥又白谷に於ける遭難に就いて……三
- ・辻本滿丸君逝く……四
- ・春の白馬頂上より糸魚川へ……五
- ・大瀧山東側と乗鞍岳から白船温泉へ……六
- ・北九州薄霧山で遭難……七
- ・一九三九年カラコラム踏査行……八
- ・新著紹介……九
- ・望月達夫譯……一〇
- 會員計報……一一
- 會務報告……一二

強なりと雖も、犬はブトメイン中毒にやられてしまふ。

わが白瀬隊では赤道を通過するところから樺太犬が死に初めた。その様子が「南極記」には次の様に記してある。

「探検隊が本邦を出發する際には三十頭の樺太犬を手に入れ、開南丸に乗せて南征の途に就いた。……

斯くして愈々赤道直下に差掛るや、機が如き炎熱は寒氣に馴れたる彼等に、一層の苦痛を與へしものゝ如く、その運動不充分なると共に、大いに元氣衰へた。南緯に入る頃より、一頭斃れ二頭斃れロックス海に到る折は、無残にも一頭を残して、全部斃死したのである。」

極地の旅行には犬が何よりも頼りであるのに、犬の全滅に會つたのは文字通り動きがとれない。かうなつては生残つた人間達の方がいくら「無残」か知れない。輸送中の犬の斃死はよくあることでリミルはグラハムランド遠征の際にも困つてゐる。

當時の報告によると、この場合は「グリーンランドのハスキーを十六頭連れて出たが、そのうち四十頭は斃れ、辛じて生残つたものも病氣になつてしまつた。これは

昭和十五年度「山日記」

右は前號會報にもあります通り、色々の都合で年末に出す事になりましたから御承知置き下さい。洵に相濟まぬ次第とは存じて居りますが、時節柄御辛抱の程を。(吉澤)

赤道の酷暑のためだとも言い、またグリーンランド地方に時々蔓延する原因不明の犬の病氣のためだとも言ひ、その原因は判然とせぬが、何れにしても食物の中毒か、潜伏してゐた病毒菌のためで、その病狀は初めは駆けずり廻り、口から泡を吹き出し、ついで麻痺狀に陥つて間もなく死んでしまふ」

リミルは仕方がなく、電報を打つてラブラドルから更に三十五頭の犬をモンテビデオへ至急送らせてゐる。

て

「最初食慾が減すると同時に脚氣がレウマチスの様に、足部に異狀を呈して来る。總て全く歩行が出来なくなるや、痲痺の如く口から泡を吹いては身體を悶えて苦しむが、この泡を吹き初めたが最後、最早一時間も保たずして絶息するのであるが、種々手を盡して薬品などを與へても更に甲斐なく、多い時には三四頭も一時に、水葬した事があつた。」

白瀬隊は樺太犬であり、リミルはハスキーで、兩種が實際上どれほどの差異あるバリエイターか私は知らないが、死に行く時の症狀は大體相似てゐるやうである。斃死の原因をリミルは不明とし、グリーンランド地方によく發生する犬の流行病と症狀が似てゐると述べてゐるのみであるが、白瀬隊はその原因に對して極めて明確な報告を提供してゐる。少し長いが繁雜を厭はず「南極記」から引用してみよう。

「再舉に際しては更に三十頭を樺太より取り寄する事となつた。で今回は増派學術部員と共にアイヌ橋村彌八附添ひの上、シドニー迄熊野丸で到着し、更に開南丸に收容せられて極地に向つたが、今度全部無事極地へ上陸し非常の効力があつた。第一次の犬は三十頭共殆ど全部死滅し、第二次の犬は殆ど全部無事であつた。原因は何れに基くかといふに、後援會で

は第一次の失敗に鑑み第二次の折には犬が横濱へ到着するや直ちに獸醫に診察して貰ひ、又その糞便を農科大學に送つて検査して貰つた所、此糞には絛蟲が居る。前回の死歿も恐らく絛蟲に基くであらう。之を驅除しなくてはならぬと云ふて薬を與へられた、船中に於ても時々注意してこの薬を與へたといふ事は恐らく死を免れた原因の主なるものであらう。」

白瀬隊は大死死の原因として絛蟲に注目してゐるが、その當否はとにかくとして、この點は今後も充分注意せられるべきことであらう。

生活環境が變ると人間に限らず犬でも病氣に侵ぜられるもので食物にも餘程注意をしてゐないと斃れてしまふ。牛津大學の一九三五年のエルスメア遠征の際には、グリーンランド西海岸のゴッドヘヴンで七十一頭の極地犬を買ひ集めて船に收容したが、これが溺死や何かで五十五頭に減少し、更に冬籠り中に鱈の干魚の中毒のために四十七頭になつてしまつた。一九一〇年のスコットの南極探検隊も犬の輸送では失敗してゐる。ノルウェー産の干魚は熱帯地帯通過の際腐敗し、これを食べた犬は病氣になり、船が目的地に着いた時には殆んど死んだり、死を免れた犬は役に立たなくなつて仕舞つたので射殺してゐる。犬の輸送、その食料は存外厄介なものである。(未了)

昭和十四・三・一〇



槍平小屋の半壊について

八高山岳部

橋本 公久

昭和十五年三月十六日午前五時、槍見温泉を出發せる我が八高山岳部一行六名は、目前の春山ヒュッテンレーベンの抱負に胸をたぎらし、重荷とラッセルワークに苦しめる長い蒲田川廻行の後、午後三時流線形の雪の堆積として辛くもその存在を示せる、槍平の小屋に到着したのであつた。

一行は直ちに小屋の發掘に取りかかり、南面の小窓を指し堀り進むこと二米餘、漸く堀りあて窓板を除きガラス窓をばづし内部に入りしに、こは如何に、梁は裂け落ち窓ガラスといふ窓ガラスは飛散し、内部

は半倒壊の形相を示し全く意外の一語につける出来事が發生してゐたのであつた。こゝに於て我々は、其夜寒風と闘ひつゝ深更迄片屋根の除雪に努力すると共に、一階に數本の支柱を設け漸く一夜を明かしたのであつたが、翌日萬一を慮り別に樑の立木と數本の生木の利用により急造の小舎を新設し、内部にストロボダツを設け、其後二十七日下山の日迄山男の修練を槍ヶ嶽に瀧谷に濱んで、快適な春山生活を樂しみ得た次第であるが、この種の事件は我々にとり深き關心事であるので、同好の士の御參考にもと、小屋倒壊の原因につき調査せる處を若干述べて見たと思ふ。

抑々、かくも立派と見做されたる小屋が何故にかくもろくも倒壊せるや。もしそれ積雪の爲のみとせば、一寸した小屋には冬春に於ては迂闊には這入れぬ事になる。そこにこの小屋倒壊の眞因を究明すべき根拠が存する。

初め積雪の状態を見たとき、小屋南部より吹きつける風の爲か雪の堆石は全く綺麗な流線形をなして、すつかり小屋をつゝみ、加ふるに屋上の積雪は深部に於て正に二米半になんとなつてゐる程、莫大なる雪量を示してゐたので、我々は倒壊原因を二も二もなく積雪に求めてゐた。所が下山二三日前種々更に検討を加へしに、雪崩の影響のあるを見出し次の如き論議をあげることを得

た。

雪崩と見做さるゝ事實を述べんに
A 外部

1 小屋北東部に、一見目立たざれども西面せる澤存在し、上部は南方に「く」の字形に曲れり。

2 澤の末端小屋の北部にデブリ二三存在し、相當廣大の地域を占め、外部の樹木直立せるに、この範圍内のは外方に傾斜し、小屋の二米北部の樞も小屋の方向と同じく傾斜す。

B 内部

1 小屋は南南西に傾斜し北西部の破損甚しく南部は比較的完全なり。

2 構造上特に南方へ倒れ易き傾向なし。

南部は梯子段あり、又柱の本数もストープあるコンクリート土間の一本のみなるに比し多く、倉庫の存在も相當利いてゐる筈なり。

3 小屋の南面、西面に於て、一階の窓の上部より上方は周囲、人の通れる程の間隙が生じてゐるこれは倒壊の際一時に壓力を受けた。け、その爲雪内に生じた熱により雪の溶解せるを示すものと考へられる。従つて小屋は積雪の爲この方向に倒れて、雪でもつてゐる譯でない。

4 階下北面の戸内部に倒れ、その雪は南壁迄侵入し、又西の戸を押し開きコンクリート土間の半

ばを占む。

これは雪が物凄く勢で侵入せし事を説明す。

これを要するに此の春、抜戸嶽より發生し、尊き人命を数名も奪ひし大雪崩と同じ時期に、この澤に同じ種類の雪崩生じ、その雪崩が直接小屋に衝突したとは斷言出来ぬが、少くもその爲生じたる積雪の「すれ」により壓力を受け、その衝動で倒れたものに違ひないと考へるのである。

屋上の積雪が之に一層拍車をかけたことは豫想される。併し四圍の積雪が却つて小屋の支持に役立つてゐる如く見えた。其他この小屋が構造上多分の弱點を藏してゐたことも又見逃せない事實である。柱の一階二階を貫くものなく、外圍に支へなく又二階の梁の構造悪し。

故に登山者は積雪期の小屋に這入るに先立ち如何に安全といはるゝ小屋でも、先づ雪崩の出る澤の有無を検討し、小屋の構造を充分承知し、確信を得て後使用すべきであり、小屋の建築主は又登山者以上に、充分の配慮細心の注意を、雪崩に對する安全性、積雪風壓に對する構造上の耐久力に拂つていたゞき度いと望んで止まぬ次第である。

以上
(本稿には略圖添付しありたれど、編輯の都合上割愛せり。)

—— 編者 ——



前穂高奥又白谷に於ける
遭難に就いて

松本高等學校山岳部

の概略を御報告致します。

三月十六日折井をリーダーとする
× × ×
春田、北村、久留の四名は松本を出
發し、十七日徳澤着、直ちに翌十八日
奥又白池畔の雪上にテントを張り、
十九日二班に別れて北尾根及び奥又
白第一尾根を登り、二十日再び二班
に別れ、一班は前穂高東壁の上半部
(A壁)を登り、一班は明日登るべき
下半部C壁の偵察の爲C壁の左端の
雪稜を登り、第一テラスよりA澤迄
雪面にステップを切つて萬全の用意
をしてテントに歸つた。既にこれま
で快晴が三日續き、雪は硬くしまつ
て登攀には絶好のコンディッション
であつた。

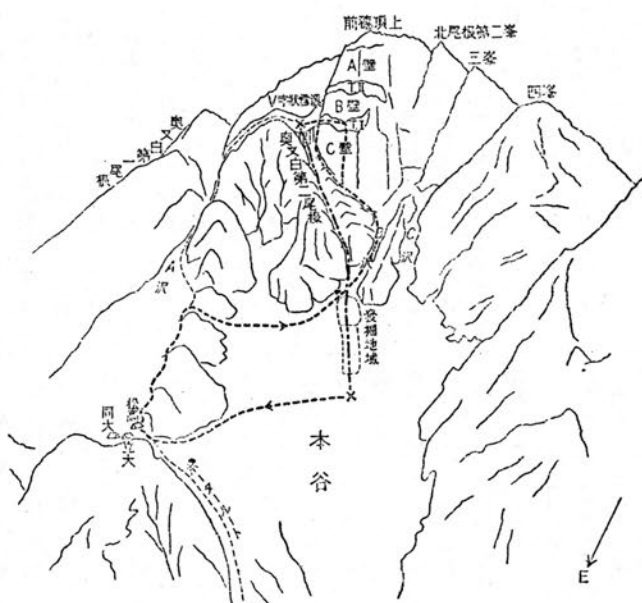
二十一日午前二時起床、快晴に勇
躍して出發準備を整へ、五時テント
發。池の正面の又白尾根を昨日のラ
ッセルを踏んで登り、本谷を横斷し
てB澤入口に着き、B澤をつめてC
壁直下に午前六時四十分到着した。
こゝで登攀パーティ折井、北村、サ
ブパーティ春田、久留に分れ、登攀
パーティは午前七時十分登攀を開始
した。サブパーティは約一時間後C
壁左端の雪の急斜面を登り始め、登

攀パーティを激勵しつゝ午後零時、
V字狀雪溪と第一テラスとの接觸點
に着き、登攀パーティを待った。折
井、北村の登攀パーティは四十米の
ザイルで結び、ハーケン十本を用意
して取付いたが、積雪期に於ては未
登攀のこのC壁は意外に悪く、ハー
ケン八本を費し、約十時間の後午後
五時半完登して、第一テラスに到着
した。直ちにテラスを横斷し、一時
間を費してサブパーティと合し、小
憩して食事を済ませ、愈々踏路につ
き、V字狀雪溪のトラバースにかゝ
つた。この日は不幸にも午前中は快
晴であつたが、午後三時頃より連日
晴天を續けた天候は突然悪化して降
雪し始めた。従つて硬く凍つた雪面
に新雪が被ひ約六十度の急斜面であ
るから雪面が非常に不安定になつ
た。サブパーティの春田、久留が先
に進み、一ビッチ横斷して停止し、
後續の折井、北村パーティと一緒に
なつた。既に夕間も迫つてゐたので
一同塊り懐中電燈を出した後、久留
は前進を始めたが、新雪の爲前日切
つておいたステップを見失ひ停止し
た。そこで折井、北村パーティが聲
つて先に行くことになり、折井は後
方より久留の下方を進み、一ビッチ
行つて確保した。折井とザイルを結
んでゐた北村は前進を始めたがその
際兩パーティのザイルが交叉(四名
が塊りし時に起因す)してゐるのに
氣付き停止した。その時不安定な雪
面は重量に耐へ切れず、突如春田の

足元から崩れ落ち、春田はスリッパし、すぐ後方に居た北村はザイルが交又してゐた爲、殆んど同時にその衝動を受けてスリッパした。久留はビックルにザイルを巻いて確保してゐたが、二人の重さが加速度と共に急激に加つた爲甲斐なくスリッパし、最後に折井は渾身の力を籠めてビックルにしがみついたが、遂に振られて跳ね飛ばされてスリッパし、四名共墜落し始め氷瀑を飛び、V字状雪渓下の雪の急斜面を轉落し、B澤下端に落ち、更に本谷を約二百五十米下迄轉落して止つた。(墜落垂直距離約三百米)時に午後七時二十五分であつた。奇蹟的に無事であつた北村は夜半失心状態より覺醒して三人を探した。久留、春田、折井の順序に殆んど一塊となつて新雪の中より發掘し、失心状態の久留を呼び起し、負傷せる彼と共に折井、春田を介抱したが、春田は後頭部粉碎、折井は外傷は見られなかつたが、全身強打及び最後の確保の際に受けた衝撃に依るザイルの緊迫の爲に窒息し、介抱の效もなく、よつて絶命と認め、兩君の位置を正し除雪してザイルにて結び、腰部を強打して歩行不能の久留を連れてテントに歸らうとしたが夜半且つ吹雪で而も北村は眼鏡を飛ばして方角が判らないのでビュッイクする事に決めて雪洞を掘り約一時間休止した。併し寒氣の爲凍傷を慮り前進しようとした時、幸運にも丁度吹雪は稍々静まり、奥又白第一

尾根と思はれる尾根の上に、微かに月光(十三夜)を認め、略々方向を判斷し、數時間の苦闘の後漸くテントに辿り着いた。北村、久留は極度の疲勞の爲其儘テントに入りて眠り、二十二日正午頃起きて同じく奥又白池畔の立教大學テントに行き救援を頼み、同じく池畔に暮營して居

人数では作業困難と思はれたのでテントに引き返し、北村は同志社の方五名と德澤に下山し、更に丁度德澤に居た島々のガイド上條孫人氏に伴はれて上高地帝國ホテルに急行し、午後十一時到着して松本高等学校へ電話にて部員遭難救援を頼むの報告をなした。二十四日午前一時半村



られた同志社の方々も加はつて救援の相談をなしたが、當日は吹雪で行動不能の爲滞在することになった。二十三日、午前中風雪止まず。午後天氣が稍々落着いたので一時頃北村は立教、同志社の方々と共に轉落したと思はれる現場に行つたが、其後の新雪の爲兩君を発見出来ず、小

員大島は直ちに新宿發、夕刻松本に着き、部長と前後處置を相談し入山の用意をなした。一方久留は同志社の方及び上條孫人氏達に守られ機にて上高地帝國ホテルに下山す。二十五日、山崎、牧野、大島、松本發德澤に急行し同夜十時着、孫人氏と相談して明日遺骸引下しの計畫を立て

その旨松本に報告した。二十六日北村及び人夫を加へ八名現場に至り搜索したが、天候悪化し、雪崩の危険が有るので發掘出来ず、埋没地域を見定め、德澤に下り、今後の搜索方針を相談す。二十七日、折井君遺族折井幸一氏、同健一氏、及び令兄正彦氏と第二次搜索隊村山朝比奈、松森、石原、恩地、北島の各先輩、及び濱口、清水、石原の部員及び特に東大山岳部より應援に來られた小林氏等德澤に到着した。二十八日、村山、孫人以下總員十八名にて搜索に向つたが、強風の爲作業出来ず、テント場より引き返す。二十九日、十九名にて發掘作業を行ひ、幅四十米、長さ七十米、深さ一一・五米を堀り眼鏡一、手袋二、帽子一を何れも雪面下約二尺の所より發見した。三十日、前日發掘を行つた地域の下、幅三十米、長さ百米、深さ平均一米に亘り發掘作業を行ひ、春田君の小リュック一を發見す。三十一日、暗澹たる曇天となり且つ氣温異常に高く、雪崩の危険を認め發掘作業を休止した。四月一日、午前六時十三名德澤發同九時四十分現場に到着し、三十日發掘を行ひし地域の最下端より約五十米下方の雪面上にザイルの一端が僅かに露出してゐるのを發見した。思ふに前日迄の異常な高温の爲、表層の雪が大分融けたのであらう。直ちに附近を發掘し、雪面下約一尺五寸の深さに兩君の遺骸を發見した。場所は標高約二千六

百米であつた。直ちに兩君をシュラフザックに入れオム引のグラウンドシートにて包み、松高ルンゼを確保しつゝ下降しルンゼ下よりスキーを機にして兩君を乗せ、午後八時、上高地帝國ホテルに着く。負傷甚だしき春田君に綱帶を施し、同夜は一同にて御通夜をした。二日、朝八時上高地發遺骸の機を引き、途中處々にあるデブリに道を切りつゝ悲しき下山をなし、午後三時深澤着直ちに駐在所にて御遺族立合の下に檢視を受けた後、前川渡に至り、此所より自動車にて稻核の月照山に向ひ、同寺にて納棺後午後十時松本に到着し、折井家に安置した。三日、松本にて茶毘に付し、一同校歌齊唱の裡に春田君の遺骨は午後三時三十分發新宿行にて東京に、折井君の遺骨は同三十分發篠井經由にて郷里上田に向はれた。此の日冷雨降りしきり西山は暗澹たるガスの中に包まれてゐた。

× × ×

以上が此の度の遭難及び其の後の經過であります。

さて我々はこゝに於て今回の遭難を惹起するに至つた原因を追求し、今後かゝる遭難を繰り返さぬやう、深く反省しなければならぬと思ふのであります。

思へば我が部は奥又白の多くの壁や尾根を登り、その一つ一つの登攀を安全確實に全うして來たと云ふ自信を持つてゐたのであります。而して今回のパーティにしても我々とし

辻本満丸君逝く

木暮理太郎

本會名譽會員工學博士辻本満丸君は、今年の二月二日令夫人を失はれて、其百ヶ日もまだ済まない四月廿四日に、ゆくりなくも其迹を追はれて長逝されたことは、誠に悼ましいと申す外に言葉もない。平素運動や昂奮に伴ふ心臓の鼓動が多少異常を呈することを甚しく氣にせられて、口癖のやうに「どうも心臓が弱くていけない」と啗たれ、訪問を申込む友人には、其好意を謝しつつ勉めて之を斷り、近い工業試験所への出勤も、車に乗つて往復する程に注意されてゐたので、そのことを知つてゐる古くからの友人は、君の健康に就て心の隅に歸す少し許りの不安の影を拂ひ切り得なかつたにしても、今こゝに君の逝去といふ現實に直面して驚かぬ人はなかつたらうし、又それが矢張り當然心臓の疾患に因るものと想像したことであつたらうと思ふ。

私は令夫人の告別式の行はれた前日の二月四日に、お悔みを述べにお宅へ參上して、三年ばかりお目に懸らなかつた間に、思の外年寄られた御様子がお先づしみ／＼と目に痛かつた。一通りの挨拶が済むと、すぐ「桃山」で催された還暦祝に出席しなかつたことの言ひ譯をされたのは、如何にも辻本さんらしいと思つた。私の慰問の言葉に對しては「全くいやな氣がします、齒が抜けたやうで心淋しいし、どうも張り合ひがなくなりました」と言はれたので、お力落しの程が察せられた。そして僅に十分間ばかりの對話で、話は山ほどあるが昂奮するといけないからこれで失禮しますと別室に退かれてしまつた。私の心は闇然として不安の増大するのを如何ともし難かつたのである。

それから二ヶ月は過ぎた、幾度か訪問して其後の様子を知らたいと思ひ立ちながら、其都度故障の爲に果せないでゐると、四月廿六日の東朝紙上に君の逝去された記事が載つてゐたので、始めてそれと知つてと胸を衝かれた、二月四日のいたゞし／＼した君の姿がすぐ目に浮んだからであつた。私が多くの人達と同じ様に、或はそれ以上に「餘程心臓が衰へた結果」であらうと、一途に思ひ込んでしまつたのも決して無理ではなかつたのである。

然るに君の愛婿中司文夫君の話に據ると、三月下旬に君は腸を病みて直に淀橋病院に入院され、亡くなられる迄丁度一ヶ月の病院生活を送られたが、心臓の働きは最後まで人並或は寧ろそれ以上であつたと醫師が

斷言されたさうである。尙ほ中司夫人から、お妹さんの鴻上夫人の大病を熱心に看護された疲勞が加はつて父の病勢を強めたらしいといふことを聞かされて、それなら何の遠慮することもなく吾々は、無理にでも何處か適當な山へ誘ひ出して、心臓に對する危機の念を一掃するやうにして上げればよかつたと思つたのであつた。しかも斯様な望がいつも宿命的に故人の生前に成し遂げられないで、後悔にのみ終る例の多いことは哀哉人の世の常なのである。

君が登山を始められたのはいつ頃からであつたか、聞いたこともなければ話されたこともないので私は知らない。しかし早くから山が好きであつたことは、日本風景論の愛讀者であつたといふ君自らの言葉によりて明かである、従つて君が明治三十八年設立當時の山岳會會員であつたことに不思議はない。唯山岳會の發起人であつた諸兄と相り合ひでもなかつたらしい（これは想像である）。君が如何して山岳會の設立を知つて入會されたか、それが私の興味を唆つて、いつか尋ねて見やうと思ひながら事に紛れてつい聞くことを忘れてしまつた。察するにこれは日本山岳志に附録として添へられた「山岳會設立主意書」といふのを見られて、熱心な君は早速入會されたものではあるまいかと考へる。

では殆んど絶體的な信頼をおいたパーティーであり、折井君達があのC壁を試みるだけの力を持つてゐると考へてゐたのであります。且つパーティーに於ても前日C壁の左端の雪稜に登り正面壁の偵察を行ひその可能性を見極め、更に歸路のステップを切つておいたのであり又當日サブパーティーをして前日の登路を辿らしめ絶えず登攀パーティーの登路選定に註言せしめたこと等、この登攀が周到な注意と、充分なる可能性のもとに行はれたことを立證するものであらうと思はれます。しかしそれだけの周到さがありながら何故あの遭難が起つたのであるかを考へると、當日の天候が午後に入つて悪化したこと、登攀時間が十時間餘りにも及び歸路に着く時刻が遅くなつたこと、及び連日の行動により身體が過勞に陥つてゐたこと等があげ得ると思はれるのであります。これ等の直接原因を追求してみると、これ等を誘發せしめるに至つた、より根本的な問題が存在してゐることを痛感しそれについて我々自身に強い批判の鞭を加へねばならぬと思ふのであります。

一體我が部は高校生活三年といふ短期間に出来る限り深く高く山の懷に入り込まんが爲に或る程度の肉體的弱さ、技術經驗の不足を部員一同の精神的結合の強さによつて補ひ得ると信じて、より深き、より高き登攀へと駆られてゆく裡に計らざる危険が潜んでゐたといふことを今にして深く感じるのであります。即ち我々は強き高き對象に向つて自己を近づけ、練るといふ信念のあまり何時か越ゆるべからざるオーバーワークに陥つてゐたので、この部としてのオーバーワークが、とりもなほさず今回のパーティーのオーバーワークとして表れたのであると思ふのであります。我々は、今迄の山行きが正しい、ふさはしい山への行き方と信じてゐたのであります。我々の嚴正な反省、批判の至らなかつた爲に斯くの如き不幸を惹起したことを深く部の責任としてお詫びする次第であります。今後この不測の裡に犯して來た危険を出来る限りあらゆる研究方策を以つて豫知し、一層慎重に山に向ふことが、自己の信念に燃え若くして山に逝かれた折井、春田兩君に對する、我々の義務であると思ふのであります。而して二君と我々との變らざる友情に結ばれた山への思慕は更に一層の嚴肅さを以つて高揚せられるのであります。終りに當り重ねて終始絶大な御同情を寄せられた諸兄に對し深く感謝の意を表し、今後とも我々に種々御教訓を賜ふことを切望致す次第であります。



と共に急に高まり、明治三十九年の鳳凰登山を手始めに、大正元年頃迄は主に南北アルプスの諸峯を活躍の舞臺として、幾多の初登山や未記録の山に登攀を遂行し、貴重な記録を山岳紙上に發表して、渺からず登山界に貢献されたのであつた。又高山植物の珍奇なる種類を採集して、斯學に寄與した功も逸してはなるまい。

大正二年頃から八年頃に至る間は、主として上信界、秩父、奥羽などの諸山に足跡を印せられるやうになつた。これは其頃から漸く心忪充進に悩み、それを氣に懸けられ始めて、比較的樂な登山を擧げられるやうになつた爲である。そして私の聞く所に誤りないとして、それは大正元年に高頭君と白樂に登られた時、霖雨の爲に大に苦しめられたことが遠因であつたことである。大正八年以後は殆ど登山を斷念されてしまつた。

明治四十一年五月に君は朝鮮へ轉任された城敷馬氏の後を襲ひて幹事(當時この稱呼ありしや否やを知らない)に就任された。發起人以外の會員が本會の役員となつた最初であらう。有志晩餐會は實に新幹事たる君の主唱によりて初めて催されたものである。けれども六、七回の後には會の主意が最初の目的から反れてしまつたといふ理由で自ら脱會を宣し、以後決して出席されなかつた。君が幹事を辭して評議員に選ばれた

のは、何年であつたか今記憶してゐないが、評議員から名譽會員に推薦されたのは昭和十年十二月であつた。

私が初めて君の名を知つたのは、山岳第一年第三號に掲載された「甲州鳳凰山と地蔵岳」と題する紀行文を讀んだ時で、殊に二年三號の「第二回鳳凰登山記」は私の愛讀指く能はざるものであつた。そして確かに明治四十四年の五月七日に、神田橋際に在つた和強樂堂で山岳會の第四回大會が開かれた時に、初めて君の風貌に接した。當時私は會員ではなかつたので、南日君に誘はれて出懸けて行つた。君は會務報告をされたやうに思つてゐる。演壇に上ると「自分は喋ることは下手である、どの位下手であるか、それは今すぐ分る」と言はれた當時のその言葉は、不思議にも今尙ほ時の如く耳朶を打つやうに感じ、夢寐として君の姿が眼前に浮ぶのを覺えるのは、君の眞摯な態度から受けた強い印象によるものであらう。感無量である。

君の葬儀は四月二十七日に、六十四歳の生涯を終るまで四十年に亘つて油脂の研究を続けられてゐた工業試験所の會議室を式場に充て、小寺所長が葬儀委員長となつて、極めて簡素に、しかし盛大に所葬を執行された。導師である傳通院の住職に差支があつて、午後二時から告別式を先に行ふことになつてゐたので、鳥

山君と私は式場に待立する積りで、其時刻より前に行つたのであるが、葬儀委員長からそれには及びませんといはれ、別室に退いて式の終るのを待つてゐた、その爲に小島、武田、田部、英木其他の諸君が來場されたことを少しも知らなかつた。

告別式が終ると引續いて午後三時から葬儀が営まれた。式場は四十坪ばかりの廣さであるが、參列者は場に溢れた。本會では靈前に花環を供へたいと、遺族の方に照會したところ、故人の遺志であるからと固く辭退されたので、私は本會を代表して鳥山君と共に葬儀に參列し、謹んで弔辭を手向けた。

此日試験所では、生前の儘である君の研究室第二部第十號室をも公開して、來弔者に觀覽せしめたのは、故人を偲ぶに適した快い處置で、机の上に置かれた書きかけの原稿紙は、特に私の目を惹いた。私は君の遺骨が生前愛用してゐた車に乗せられて、君の靈の住家であらう研究所の門を、これを最後と出で行く光景を胸裡に思ひ浮べながら、願みがちに歸途に就いたのであつた。

日本山岳畫家協會作品發表會 豫告

七月十日頃

於 日本橋 高島屋

春の白馬頂上より糸魚川へ

盛岡 英治郎

四月末の連休を利用して山にはいるべく細野についたのは四月二十四日だつた。それより後ほとんど毎日黒菱や猿倉や長走り澤まで往復して身體の調子をとのへ天候の定まるのを待った。

四月三十日 前七・〇五細野出發
七・五〇二股九・〇〇下ノ大平(第一回中食) 一・〇三〇猿倉一・五〇白馬尻後一・一〇三合雪溪出合(第二回中食) 三・四五ネブカ平五・二〇村營小屋(第三回中食) 六・二〇頂上小屋着。

細野から下ノ大平までは徒歩、大平にてスキーをはく。ネブカ平でシユタイグアイゼンにかへる。天候は細野より白馬尻までは晴、白馬尻のあたりより曇り勝となりネブカ平より上では相當に吹かれた。

五月一日 前六・三五頂上小屋出發六・五〇白馬頂上七・二〇三國境八・二五鉢ヶ岳雪倉山九・二〇雪倉山(第一回中食) 一・〇〇雪倉山(第二回中食) 後一・〇〇赤男山、朝日岳一・四〇朝日頂上(第三回中食) 二・四〇長樽山四・〇〇長樽山黒負山五・〇〇黒負山六・一五ピリク地(黒負山尾根上にて一五二七・〇米の三角點よ

り南側八〇米低きコル)

白馬小屋より赤男山までアイゼン後ピリク地までずつとスキーだ。だが黒負頂上へ登るときに五〇米位の間アイゼンを使つた。天候は一日中晴れだつた。

五月二日 前八・二五ピリク地出發八・五五、一五二七・〇米三角點一・〇〇〇ジャンクション・ピーク(一五二七・〇米三角點と赤男山とのぼ中間) 一・〇四五第一回中食後一・〇五赤男山頂上二・〇〇第二回中食二・三〇舊縣道大峠ノ小屋(六五一米) 四・〇〇小瀧村夏中四・五五大赤北線小瀧驛五・五六同驛發六・三二糸魚川驛着

出發以後赤男山尾根上、一五二七・〇米三角點より東々北、地圖上二つのピークまでアイゼン。これよりはスキーにかへジャンクション・ピークの直下より再びアイゼンをはいて赤負頂上まで行きこゝで雪庇を下りて後スキーに替へ一すべりで大峠に出た。小瀧村は櫻が満開だつた。天候は終日晴。

地圖は陸測五萬分ノ一 白馬岳、黒部、泊、小瀧、糸魚川。

一行は私と細野の大谷定雄の兩名。白馬頂上小屋は誰が使つたのか

(九頁下段へ)



大瀧山東側と

乗鞍岳から

白船温泉へ

田邊主計

昭和十五年（一九四〇年）四月二十五日。須砂渡より大瀧山へ向ひ鍋冠山より引返しツメタ澤を鳥々へ出て二十八日番所―冷泉小屋―白船温泉。二十九日夜歸宅。

二十四日。夜おそく新宿驛發。半月ばかりで再び山歩きが出来るのはうれしい。我々は四月二日の夜たつて一週間白馬の方へ行つてゐた。藤島敏男君と細野の山案内二人とはじめのつもりでは白馬頂上小屋へ行き、そこから朝日―長褥―黒岩山―犬ヶ岳―白鳥山と尾根つたひに親不知まで行きたいと考へてゐたのであつた。雨で細野に一日、吹雪で頂上小屋に一日と滞在が延びた。白馬から雪倉岳と鉢ヶ岳との中間で蓮華温泉からの路が稜線に達してゐる所まで行つた所、天候は再び悪化して來て風も一そう強くなりその先一日風に吹かれて尾根をスキーを擔いで歩く氣がなくなり早く風を逃れ度いと最初の「つもり」を簡単に放擲して蓮華温泉小屋に降り、豫定よりも早

してひろめた人は如何いふ人たちか。然し或る人々を言ひ表す爲に言葉を作るといふよりも、寧ろ、或る言葉を作るとそれに適しい様な人々が續々現れて來るのではないかと思はれるから不思議だ。例へば「ハイカー」といふ言葉があればそれが持つ縁さ加減に正に適應した人々が現れ、或ひは何々といふと何々以外の何者でもないものが輩出するやうに見える。

それらの連中の中にはシュタイクアイゼンの齒をむき出しにしてルックザックに結付けてゐる人たち（汽車に乗つたら直ぐ履くとしか思へぬ）、ペラ／＼の運動着に大型のビッケルを持つてゐる人それでズック地の靴なんかをはいてゐる人たちがゐる。それにどういふ家庭の子供たちが知らぬが年頃のガサツな女の子が實に多い。それらが雜然と舞めき合つてゐる。そうすると「窓から絶対に入らぬやうにしてくれ」とか擴声器でどなつてゐるのが聞えて來るといふ有様である。

二十五日。豊科から須砂渡まで自動車。歩いて行くに左大瀧山道右常念といふ明確な道しるべが建つてゐる。この道しるべはすつと先々まで續いてゐるがそれに従つて行けば、結局小倉村や三田村からの登路に合するやうであつたから、それならば寧ろその方面から登つた方がよいのではないかと思はれる。我々は東澤の方から鍋冠山へ出るつもりであつ

たが、大野澤へ入つて行つたのであつた。結局一つの無人小屋に着いた時は既に三時をまわつてゐたので泊る事にする。

二十六日。澤を續けて登つて、冷澤へ出る。そこから尾根つたひで鍋冠山へ向ふ。その邊までスキーは擔いで歩いてゐたわけである。鍋冠を越したあたりで二時。路は一度下つて大瀧山とおぼしき山は地圖で想像してゐたよりは遙かに高く又遠く彼方にあつた。それは常念から鉢ヶ岳と續いて來てゐるから正しくそれに相違ないがこれから登つて行く氣にはなれない。案内の方が熱心でこれから澤へ下りて一晚泊つて出直しませうかなどと言つたが、斷念して里へ早く降りやうといふ氣持ちになる。早速引返し冷澤へ來る（五時）。

そこからは小倉村に近いやうだが、次に乗鞍の方へ行くつもりならば鳥々へ出やうといふので急にツメタ澤を下り、その夜は徳本峠への道の分岐點にある水電取入口番人のうちに泊めて貰つた。

二十七日。鳥々で晝飯。前川渡まで乗合自動車。雨になる。番所に泊れて到着。

二十八日。夜半までは降り續いたが曉の四時には止んでゐたので大いに喜ぶ。私は楽しみにしてゐる遠足の當日が雨になつて前夜から用意してあつた海苔巻や玉子焼や栗のきんとんなどを懐側へ食卓を持出して食べたしたり子供を思ひ出した。

雨が止まなければさつきと歸つてしまふまでの事であるが、私には初めての此の土地をもう少し見て歸りたい。雨の止むことを希ひながらしばらくは寝つかれなかつた。夜半に二度起きて外を眺めた。朝になる。空氣がつめたく心地よい。新雪が近く山々にも降つてゐる。番所の風景は美しい。上高地あたりへ行くよりもこの乗鞍の麓を歩いた方が楽しめるのではないか。一年中のどの季節にもそれ／＼の美しさと落つきとがあり、峠を越して行く先々もあるのではないか。私は今まで餘りスキー地として有名なと小屋などのこむきをきいて敬遠してゐた事を悔いた程である。これから時々來たい。冷泉小屋着十二時。

スキーは森林に入る所から。一時に冷泉を出て白船温泉へ向ふ。大體夏路に沿つて行くつもりであつた。距離八科で下り、スキーはすつと下方温泉近くまで使へるやうに思はれた。雪も少し降つてはゐるが時々日が照り視野は貧弱ではない。然し小屋番は夏路も雪で解らないのだし今頃誰も行く人もないのだから鈴蘭小屋から行つたらどうですかとしきりに止める。我々も皆はちめてなのだから一應止めるのも無理はないが、知らない土地を相談しながら行くのが好きなのだし心配はしなくてよいと言つて出る。然し尾根は相當森林が深く展望は餘りきかない。私の考へで一度湯川の澤まで降りた事は失

敗であつたらしい。澤治ひは案外悪るく三回位涉つたり川岸が歩けなくなると又上の方へ登つたりしてゐるうちに時間は遠慮なく経過し、しかも夏路らしい所へは出ない。六時になつて幸ひ路らしいものが雪の中にあらはれてゐるのが見つかった。後はそれに従つて行けば良いのであつた。これは地図にある夏路から分れて入つてゐる湯川林道であつて澤のすぐ上にあつたがその邊から澤を離れて山に入つてゐるらしい。少し行くと道しるべもあつて益々明瞭になつた。最初に藤島君が考へた通りちようどこの邊へ出て来るやうに尾根近くを滑降して来れば短時間に來られたものと思はれた。温泉に着いたのは八時。この短距離に七時間かかつてゐる。あきれたものである。

二十九日。誠に良い天氣である。朝ねをして澤ノ渡十二時半の乗合自動車に乗りその夜新宿に歸着。新宿驛の雑沓は又大したものであつた。いや松本驛に於て既に「今度の列車は二等三等全部満員です」と擴聲器が叫んでゐた。そして改札口に黒山の人だかりであつたから我々は待つて次の列車に乗つた。近時戦争景氣だか何だか知らないが泥酔者が多い。新宿のプラットフォームでもちよつと目に入つただけで五人のヨッパイがゐたがそのうちの三人はヘドを吐いてゐた。悪い酒を吞まされるのか胃弱なのかであらう。ヘドは行く先々に散つてゐる。品川驛へ

來ても大森驛へ來ても到る所ヘドである。うちへ歸つて來た時にはドウかゴミタメの中からはい出して來たやうな氣持がしてゐた。決して山から戻つて來たとは思へなかつた。あの美しい峯々や麓の風景や又樂しかつた人々とのまじはりを出出すのは、むしろ、しばらくたつてからであらう。

北九州、薄霧山で遭難

月原 俊二

福岡縣小倉市下津四九七番地、小野一喜氏(三四)は、二月十一日の紀元節に豫て周知のコース筑豊の雄福智山(九〇〇米)より薄霧山(牛斬山五八〇米)の雪中徒歩縦走を成就せんものと、同日早朝小倉を出發、直方驛經由に福智山に向ひしも、十一日夜に至るも歸宅せず、十二日より勤務先たる若松石炭共同販賣組合員諸氏、地元警防團多數の捜査となりたるも十二、十三、十四日と降雨と濃霧續きに捜査渉らず、十五日の晴天に一舉百人近くの捜査網に遂に屍體となりたるを發見せり。

(遭難場所) 福岡縣田川郡方城村宇廣谷地域内、薄霧山頂を去る北西約貳軒、第四の小隆起より西南百米下の小谷途中。ルックは背負ひ、仰向けに眼を開き、手足を伸ばし苦悶の情なし。防寒帽は尾根近く屍體より五十米上方、ステッキは一〇米上方に遺失しあり。眼鏡は遂に發見し得ず。(尾根上より折柄の強風に足を取られてスリッパせるものと思ふ。しかしスリッパが最後の原因ではなく、極度の疲労に加へて、二三回スリッパ廻轉する途中失神せるものにして何處にも打撲痕跡の跡なし)(日時) 十一日午後八時前後絶命と思はる。

尙少し詳細に記述する義務が筆者にあると云ふのは、同日十一日私達岳友、橋本、藤崎(JAC會員)、島山、奥、藤崎弟、岡田と筆者の一行七名は同コースをスキーにてツアーを試み、折柄の北の強風と濃霧の中を辛うじて薄霧山に至り山麓探銅所驛に這々の態で下山。このツアー途中、福智山・薄霧山(約十軒)の間、赤平田のつじ(七九一米)を去る六百米の一隆起(俗にへり坂のつじ)七六〇米の山頂にて同氏と遭過、元氣一杯の同氏の態度、言葉に驚ろき、折柄の濃霧にお互に下山の方向たち難く二、三コースの事について言葉を交はし滑降せり。無論小野氏もスキーを使つてゐれば同導は勿論の事であつたが、スキー滑降と徒歩者とは問題にならず、氏の元氣激刺の姿に心配もせずシュブールを辿つて來るものと思ひ先發す。時に午後四時近く、小生等が探銅所驛に到着せるは六時半頃であつた。すぶ濡れの私等は驛前矢山方にて焚火と鯉味噌汁、酒に暖を取り二列車遅れて歸途についた。明けて十二日夜小野氏の親類の人(小生友人)が來

莊、實は小野氏が福智山に登山して歸宅せず、山に詳しい貴兄に山の事、御都合では案内を乞ふ旨を申出來たり、偶然にも、私等一行の遭遇せる人と人相骨格、服装一致、同氏のコース、足取りを研究、捜査區域を非常に縮少、十三日、十四日は十一日より引續きの悪天候に思ふに任せず、十五日は折柄の晴天に、私の班は一應同氏と遭遇地點へへり坂のつじ迄到り、斑に残る雪中にシュブールを辿つてゐる同氏の足跡をピクトと、中途の尾根に發見す(矢山氏の談に依れば十三日多量残雪の時足跡が續いてゐたとの事)。正午過ぎ遂に右記の地點にて屍體を發見す。

因みに一月下旬より降雪、二月に入つても新雪を加へ、八幡市背の皿倉でさき山頂よりドライヴウエーを一氣に街の山手線迄滑降出來、各市の街はづれでは始めての街のスキーヤーが出現する程、筆者物心ついて始めて知る一大雪災變に、筑豊地方山岳の降雪は驚異に傾するものがあつた。

十一日尾根筋は三〇糎より一米餘に及び、氣温零度前後にて雪しまり悪く、雪になりかけの小さい雨飛礫は非常に煩に痛かつた。福智山より遭遇地點迄膝を没する足跡が、私達のコースを指示するかの如く残つてゐた。

遭遇地點を過ぎる頃より高度は低下して六百米前後の平坦な尾根續きとなり、風雨は左類(北東)を凍らせ左手の振出すシュートックは時折吹流されて要を成さず難行す。草尾根特有の類似の支尾根東西に走りともすればコース外に入らんとせるも、辛うじて正コースを辿り得、薄霧山日立山小屋に到つた時は蘇生の思ひであつた。

スキーを使用して斯様な条件下にあつた私達の體験よりして、小野氏の一步々々の歩行は忍耐と勇氣を如何に鈍らせた事であらう。又、先走のスキーシューブールを忠實に辿つてゐるコースの心配は無と云え、精神的衰弱も半分の役割を持つてゐた事が確認出来る。遂に努力も報ひられず、人智人力の總ては使ひはたし、疲労と寒氣に夢の世界を迫る如く山に召されて行つた事であらう。

食糧は米食壹個もなく乾パン少々、甘納豆百匁其他果物菓子類少々。晝食もこの程度で熱量と認むべき何物も所持してゐない。死後のルックザックには少量の甘納豆が残つてゐた由、未亡人より後聞す。

裝備は純毛シャツ、純毛チョッキ、夏用カッターシャツ、スレン色無防水上衣、純毛背廣服上衣。下衣は純毛パッチ、純毛背廣服ズボン(肌より順に)の着のみ着のまゝにて着換なし。手袋は軍手一つにて完全に凍傷にかかり眞白くなつてゐた。帽子は蒙古式防寒帽にてビロードの毛並のもの。靴はスキー靴型に八甲鉾程度を打鉋せる無防水甲皮。靴下不明。



一九三九年 カラコラム踏査行

E・シプトン

望月達夫譯

一九三七年「地圖の空白部」なるシヤクスガム河流域を探検したエリック・シプトンは、昨年同じカラコラムの未踏地域に入つたが、九月上旬勃發した今次歐洲大戰の爲不幸にもその後半の計畫を放棄して、英本國に歸還の已むなきにたつた。一九三七年の遠征に就ては、その著「Blank on the map」に詳述されてゐるが、本會報第九十三號附録の「カラコラム遠征年譜」(吉澤氏作)を参照されれば更に興味あることと思ふ。尙本文はシプトンが本年一月二十八日のステイツマン紙(岳友森脇兄寄贈)に寄せた「Sixteen months in the Karakoram」の譯である。

地球上最大の山脈とも云ふべきカラコラム主脈の南側は、その氷河溪谷の大部分が、既に踏査探検

され、又地圖も作られてゐる。その先驅者の中には、ゴドウィン・オースティン、マーティン・コンウェイ、ウワーク

マン夫妻、アルプツイ公、フィッサー夫妻等の名前が挙げられるであらう。然しこの山脈の北側は接近することが難く、其處にはまだ、未知未踏の廣大な地域が残されてゐる。約五十年前、ヤング・ハズバンド卿は、この地域のほぼ中央部を通過し、その時、ムツタグ峠を越えてシヤクスガム河をはじめ世に紹介したのであつた。其の後、メイソン、フィッサーを始め、数人の探検家が此の地域を踏査したが、此の地方の地圖にはまだ相當大きな空白部が残されてゐたのである。

王立地學協會援助の下に組織され

た一九三七年のシヤクスガム遠征の目的は、アギール峠周辺の地域と、K2及びシムシャル峠間のカラコラム主脈北側の大氷河地帯とを詳細に測量作圖することであり、それはかなりの程度迄成功を納めた。けれどもアギール山脈や、シムシャル峠附近

の山々には、まだまだ未踏地帯が残されてゐた。

以上の列記に依つて氏を死に至らしめた原因とその来る可き最悪の結果は之以上贅言を要しないと思ふが今一つ、氏は非常に屈強の士にして會社は無缺勤で精力家にして豪膽、その豪膽が福智山より更に雪尾根を薄霧山へ單獨行を強ひたと思へる又、同盟に對して縱走成功の曉は天狗の首を取つた以上に自慢が出来ると云ふ漫然たる榮譽心が常に雪路を先へ先へと開明の境地に迄リードしてゐた事を後聞するに及んで慄然たるものがある。之より押して、我等一行と遇つた節の元氣な様子は虚勢であつて、既にこの頃、相當の心身の苦痛があつたのではなからうか、過ぎたる事は及ばず、實に哀惜の情に堪えず。白銀に美粧された淨き雪山に眠る小野氏の靜かなる御冥福を祈つて報告を終る。合掌。

此の地域に於ける冬季の状態や、住民、動植物等に就いて知れるところ甚だ少なかつただけに、この遠征にかけられた興味も亦少なくなかつた。バーティは四名の英國人、二名の印度人測量者、九人の親愛なるエグゼレストの友、シエルバを以て組織された。シエルバ達は今日既にヒマラヤ遠征には、不可缺の構成分子となつてゐる。ペーター・モットは測量者として、E・C・フォントインは醫者乃至動物學者、人類學者として、スコット・ラッセルは植物生理學者として参加した。測量者たるフザル・エライ、イナヤト・カー

の二人は印度測量局から加入し、又過去九回のヒマラヤ遠征に私と共に働いてくれたアンタルキイは、シエルバの頭として隨ふことになつた。又A・F・ベタートン、キャムベル・セコード兩氏は、最初の數週間を吾々の遠征に従事することゝなつた。

冬季に備へて特別の用具を持参した。寢袋は、馴鹿の皮と羽毛とを三重にしたものを用意し、又スキーも携行した。吾々の計畫は、一九三九年の夏をヒスパー及びビアフの二氷河におくり、次いで十月の後半を、この山脈北側の冬の根據地への通過に充てやうと云ふのであつた。吾々は天文學上の仕事に必要なダイヤモンド・シグナルを得る爲に、無電の小型受信器を携帯したが、これは又外界の通信を受ける唯一の機械でもあつた。

カラコラム山脈の他の部分と比較して、ヒスパー・ビアフ氷河地帯は、旅行者にとつて割合接近し易いとされてゐる。併し之等二氷河のみならず、その全分水嶺地域に亘つて、測量が甚だ不確實な爲に、今日迄議論が絶えないのであつた。

一九三三年、かのコンウェイ卿がヒスパー峠を越えた時、彼はビアフ氷河の源頭に一大雪原を見出し、その面積を約三百平方メートルと測定して、これに「雪の湖」と命名した。彼が此の言葉によつて、何か普通とは異つたものを意味せんとしたかどうか、私のよく知る處ではないが、月日の立つにつれて、「雪の湖」は次第に地理學上の推論中に相當重要性を占むに至つた。事實最近に至つて、そこには、極地以外には知られてゐない尠大なアイス・キャップと呼ばれる地帯が存在し、この地方の大氷河を育むるに相違ないと、考へられてゐた。

一九三七年の遠征に際しては、未踏の氷河を北進して「雪の湖」に近づき、このアイス・キャップの説を

（六頁下段より）
煙突をこはしてありそのために雪がほとんど充満してゐたので、飯をたいて小屋の内部を整理するまで三時間餘りもかゝつた。冬山でとき／＼かうした不愉快なことがあるが、夏ならばいさ知らず積雪期は餘り無茶な人が登山しない筈だから、少し注意してくれば後に登るものが困らなくてすむのだが。小屋番のゐない小屋ならば紡績工場に於ける様に「後の者のために」などといふボスターを貼らねばならぬさうである。

一九三七年の遠征に際しては、未踏の氷河を北進して「雪の湖」に近づき、このアイス・キャップの説を

打破したが、詳細にそれを測量し、地圖の上にその正確な位置を記し附ける時日が無かつた。昨夏の吾々の主たる目的は、いまだに存在せる地形學上の不明を一掃し、フンザ溪谷に於ける印度・露西亞國境山脈からヒスパー氷河へかけて三角測量を遂行し、次いでこの地域の詳細な地圖を作成することにあつた。

吾々一行は六月十六日スリナガールを出發、カマリ峠、ギルギットを経てナギールに旅した。ナギールのミール・サヒブは心良く吾々を迎へ、多大の援助を與へて呉れた。

過去の時代、即ち十九世紀の中葉迄は、土地の旅行者に用ひられた許多の氷河の峠が、このカラコラムを越えて、ラダーク、バルティスタ

ン、フンザ、新嘉省へ向つて通じてゐた。それ等は主として匪賊や住民の移住に用ひられ、或は又此の地方に治安が確立される以前には、主要

路の危険を選けた商人達に用ひられたものであらう。フンザやナギールの土着民を一人残らずマホメット教徒にしてつたかの傳道者が、當時

としては實に驚く可き、八十哩の氷河を踏んでヒスパー峠を越へ、バルティスタンからやつてきた事實は、

洵に興味盡きざるものがある。

之等古代の峠は、今日では既に殆ど用ひられてをらず、又その大部分が跡形もなく失せてゐる。吾々が興味を懷いたことの一個も、之等の峠を見出し、古の旅行者が苦しんだ路

線を踏査し、その放棄の原因を探究することにあつた。幸ひ吾々と同じ、この問題に興味をもつてゐたミール・サヒブから、最近の氷河變遷の事實と土地の歴史とを教はることが出来た。

一行は約二週間をナギールの近くにおくり、測量と採集にいそしんだ。次いで私とアンタルキイがヒスパー氷河への荷物運搬を指揮してゐる間、ラッセル、ベタートン、フォ

ンティン、セコード等はヌシク・ラを越えてバルティスタンのアランドユへ行つた。この峠は一八九三年の

コンウェイの遠征に同行したブルーノ、エッケンシュタインが越えたものであり、それ以前にも、又その後にも數回試みられたものであつた。

これは明瞭に古代の峠に違ひないのであるが、今日、土着民は誰一人としてそれを越えることを肯へじなかつた。

その間モットは三角測量に多忙を極めてゐた。直後彼は經緯儀を携帯したまゝ、ある山の頂から落ちた爲

に、彼の仕事は残念にも中止の已むなきに到つた。經緯儀は酷く破損したが、幸運にもモットの怪我は輕くてすんだ。

八月上旬、吾々はヒスパー峠を越へて「雪の湖」へ達した。私はナギールの人夫が荷物を運搬してこの峠を越え、更にその一部が「雪の湖」に滞在してくれることを期待してゐた。併しその中の只一人を除いては、

ヒスパー氷河の奥へ入ることを拒むだ。その理由にも種々あるが、要は今日彼等が氷河の最上部へ行くことに非常な恐怖心を抱いてゐるのである。しかし吾々は既に彼等に山靴や寝袋や天幕を與へてゐたのだつた。

この爲に荷物運搬の仕事は、吾々自身とシェルバ及び只一人のナギール人夫の双肩にかゝつてきた。この人夫は夏中吾々一行と共に働いてくれた。

最初の豫定では、約二箇月を「雪の湖」におくる筈であつたが、ナギール人夫に對する誤算は充分な食糧と燃料を搬ぶことが出来ず、爲に一行を三班に分割するの結果となつた。フザル・エライは「雪の湖」

及びビアフ・氷河地帯に残り、モットとラッセルは食糧補給の可能な西方の最も錯綜した地域に赴き、フ

ンティンと私はバルティスタンのアスコレで食糧を補給し、更にバンマー氷河を踏査することになつた。そして私がそこで測量に従事し

てゐる時、フンティンは「新ムツタール峠」と呼ばれてゐる峠へ達した。これは昔日のムツタール峠が、

氷の状態の變化した爲に通過不能となつた今日、バルティスタ人が新疆省へ達するに用ひる峠である。

バンマー氷河の源頭は、私が今迄に遭遇したこともないやうな莊麗な岩峯が圍繞してゐたが、そこから「雪の湖」へ達すべき一峠を見出し、これを越えた。一方フンティンはチ

ゴ・ルンマ氷河を登り、その源頭に一峠を見出して、これを越へ、十月上旬にギルギットへ歸還するを得た。私は「雪の湖」でラッセルと合流し、この地域北方の分水嶺を踏査し、更にシムシャル峠の冬の根據地へ横斷すべき一峠を発見することが出来た。

吾々が無線電信によつて、歐洲戰亂の報に接したのは九月下旬のことであつた。吾々の滞在してゐたこの

「雪の湖」が、餘りにも平和であり靜穩であつたが爲に、このニュースは全く夢想的であり、直ぐにはその眞實なるを信じることは出来なかつた。結局吾々は遠征を中止して歸國することに決定した。来る可き一年

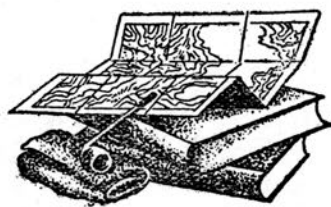
間を、無上の興味と熱意に燃えつつ期待して已まなかつた吾々にとつて、この悲しむ可き中絶は實に耐へられぬ苦痛でもあつた。

然し吾々はこの成功多かりし夏にやゝ満足を見出し得る。フザル・エライは實に驚く可き仕事を成し遂げたのである。彼が仕事をしたその速度、精力、熱意に對し、又その完璧なる技術に對しては吾々一同の等

く稱讃措く能はざる處であつた。イナヤト・カーンもヒスパー氷河の下部、ナギール附近、ミナビン氷河に於て優秀な仕事をなした。そして吾々一行の測量した全區域は實に一六〇〇平方哩に及ぶのである。

以上

× × ×



新著紹介

“THE THRONE OF THE GODS”

An Account of the First Swiss Expedition to the Himalayas by Arnold Heim and August Gansser

クラヴィヤ寫眞二百二十葉 スケッチ十八葉、樂節十一箇、展望連續寫眞二葉、レリーフ式地圖一葉 譯者 Eden and Cedar Paul, Macmillan and Co., Limited, St. Martin's Street, London, 1939.

ハイムと其の僚友ガンサーの共著になる「神々の王座」は近頃山の本で此の位がうちにあり、色々の意味で出色のものを見た事がない。本書の原書は獨逸語であつてそれに就いては小池氏が「山小屋」に紹介されてゐる。私が手にしてゐるのはその英譯であるが寫眞はチュリヒで同時に印刷したものであるとの事であるから實によく出てゐる。

ハイムはその序文によると歐洲ア